

パチ屋の店員

中 野 泰 治

奨励者紹介〔なかの・やすはる〕

同志社大学神学部准教授

〔研究テーマ〕17—18 世紀英米の神学・クエーカー研究

愛する者たち、互いに愛し合いましょう。愛は神から出るもので、愛する者は皆、神から生まれ、神を知っているからです。愛することのない者は神を知りません。神は愛だからです。神は、独り子を世にお遣わしになりました。その方によって、わたしたちが生きようになるためです。ここに、神の愛がわたしたちの内に示されました。わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。愛する者たち、神がこのようにわたしたちを愛されたのですから、わたしたちも互いに愛し合うべきです。いまだかつて神を見た者はいません。わたしたちが互いに愛し合うならば、神はわたしたちの内にとどまってくださり、神の愛がわたしたちの内です。

神はわたしたちに、御自分の霊を分け与えてくださいました。このことから、わたしたちが神の内にとどまり、神もわたしたちの内にとどまってくださることが分かります。わたしたちはまた、御父が御子を世の救い主として遣わされたことを見、またそのことを証しています。イエスが神の子であることを公に言い表す人はだれでも、神がその人の内にとどまってくださり、その人も神の内にとどまります。わたしたちは、わたしたちに対する神の愛を知り、また信じています。

神は愛です。愛にとどまる人は、神の内にとどまり、神もその人の内にとどまってくださいます。こうして、愛がわたしたちの内に全うされているので、裁きの日に確信を持つことができます。この世でわたしたちも、イエスのようであるからです。愛には恐れがない。完全な愛は恐れを締め出します。なぜなら、恐れは罰を伴い、恐れる者には愛が全うされていないからです。わたしたちが愛するのは、神がまずわたしたちを愛してくださったからです。「神を愛している」と言いながら兄弟を憎む者がいれば、それは偽り者です。目に見える兄弟を愛さない者は、目に見えない神を愛することができません。神を愛する人は、兄弟をも愛すべきです。これが、神から受けた掟です。

（ヨハネの手紙一 4章7—21 節）

失踪

本日の聖書箇所は、愛についての箇所です。互いに愛し合うことの重要性が説かれています。ある意味で、よく聞く聖書的には平凡な言葉ですね。ああ、また、愛の話かと思われるかもしれませんが、今日はちょっと変わった話をします。ここにお集まりの皆さんはおそらく20歳前後だと思いますが、私が皆さんの年の頃、大学生ではありませんでした。パチンコ屋の正社員をしていました。今でこそエンターテインメント企業の一つとなっておりますが、20年ほど前のパチンコ屋といえば、出所の怪しいおじさんやおばさんたちが働く吹きだまりのような場所、お客さんからも玉を投げられたり、コーヒーをかけられたり、罵倒さ

れたりするような場所でした。働く人たちは、どこから来てどこへ行くのか分からない行きずりの人たちでした。いわゆる底辺の場所です。なぜパチンコ屋で働くようになったかと言えば、私は高校時代から三年ほど、半ば引きこもり生活をした後、同志社大学神学部に入りましたが、昔から父親との関係が悪く、大学生になっても毎日のように電話をかけてきて、生活について細々と指示をされていました。大学生になって三ヶ月ほどした時、あまりに過干渉な父親の態度に業を煮やした私は、思わず電話先で「いい加減、うるさいわ」と怒鳴りました。そうしたら、「誰が育てたと思ってるんや。偉そうなことは金を稼いでから言え」と言われて、「ああ稼いだるわ」と思って電話を切り、その勢いのまま下宿から失踪しました。失踪を決意したのは、「金」「金」「金や」「金稼げ」としか言わない親と金輪際、縁を切るつもりだったからです。それくらい親が嫌いだったのです（今は和解しております）。ちなみに母親も今の言葉で言えば、過剰な愛で縛り付ける毒親というタイプでした。失踪先を名古屋に選んだ私は、一週間ほど名古屋駅前の公園で過ごした後、アルバイト情報誌を見て、まかない付きの住み込みで働ける場所を探しました。はじめは警備員などを探していましたが、結局どこもだめで、最終的に場末のパチンコ屋で面接を受けることになりました。面接官は明らかにヤクザさんでした。背筋がピシッとなりました。たわいもない会話を続けた後、明らかに家出と分かる私はなぜかその場で即採用され、その日から住み込みで働くことになりました。それまでパチンコなんて全く知らなかった私は、仕事の内容も全く分からないまま、とりあえず教えてもらったことをやっておりました。そのパチンコ屋の店員は、ほぼすべての人が近くの同じ社宅に住んでおりました。借金を抱えて逃げてきた人、交通事故か何かを起こして逃げて来た人など、私以外の人はなんらかの事情を抱えて「偽名」で働いておりました。私一人だけ本名で働いていました。

出会い

私の部屋の隣には、当時 38 歳の鈴木さんという方が住んでおり、その人は怪我で引退した元ボクサーで、ヤクザの用心棒をしていた人でした。そしてその鈴木さんとりわけ仲がよかったのが梶田さんという 50 代の方でした。私一人だけが 20 代でしたが、よく三人で真夜中の二時とかに自転車に乗ってクルマヤというラーメン屋に出かけ、ラーメンを食べるという生活をしておりました。話は少しずれますが、こうした底辺と呼ばれる人たちは単に可哀想な生活を送っているわけではありません。貧しい中でもそれなりに人生を楽しんで生きています。もちろん格差を肯定するつもりはありません。それは是正されねばなりません。

話を戻します。お隣の鈴木さんはお説教するのが大好きで、私を部屋に呼びつけて、いつも熊本産の芋焼酎を飲みながらぐでぐでに酔っ払い、くどくど同じことを繰り返しては仕事のことで私を叱っておりました。はじめは本当に鬱陶しいなと思っておりましたが、酔っ払っているので、話が結局ぐるぐると同じポイントに戻ってくるのが面白くなってきて、またなんだかんだで教えてくれることにありがたみを感じて、呼びつけられるのではなく、私の方から鈴木さんの部屋に出入りするようになりました。あまりに一緒にいるので、できているのではとの噂が出るくらいでした。

突然の無視

そういう日々を過ごしていたのですが、半年ほどして何かの節に鈴木さんと梶田さんが仲違いし、つい

でに私も梶田さんから完全に無視されるようになりました。それ以来一年近く、梶田さんは目も合わせず、私を避けました。はじめは一体何なんだと軽く怒りを覚えましたが、そのうちその感情さえも忘れてしまいました。実際に一緒に仕事をしていても、私の中で梶田さんの存在が全く無になったわけです。そうして一年半ほどパチンコ屋で、若かったため人の何倍も働いておりましたが、椎間板ヘルニアと座骨神経痛になり動けなくなったため、社宅は同じでしたが、同系列のカラオケ屋の副店長に転職になりました。場末のカラオケ屋の仕事は本当に暇で、昼間はお客さんもほとんど来ないので、朝から夕方まで毎日隅々まできれいに掃除して、あらゆる仕事をして、時間があまるわけです。だから、受付でぼうっと前を見て過ごす日々になりまして(まっすぐ顔を上げていないといけません。下を向いてただで怒られました)、仕事をしてお金をもらっているというより、自分の膨大な時間をお金に換算しているような気分になり、人生このままでいいのか、これで人生終わるのかと考えるようになりました。ですので、その後一年ほどカラオケ屋で働いた後、他の店舗の店長になるという話が出た時、ああ、退職してもう一度同志社に帰って大学で勉強したいと思うようになったのです。

予想していなかった涙

こうして約二年半、パチンコ屋とカラオケ屋で働いた後、ついに辞める日がやってきました。どこから来てどこに行くのか分からない人たちがばかりでしたが、お世話になったので、パチンコ屋やカラオケ屋で一緒に働いた人、一人ひとりに退職の挨拶をして回りました。人の出入りはよくあることなので、皆さんにさりと簡単に送り出されましたが、私から目をそらす梶田さんにだけは挨拶しようかどうか迷いました。そして実際に引っ越しする当日、やはり挨拶しないのは不義理だと思い、パチンコ屋のホールで働いている梶田さんに声をかけ、お別れの挨拶をしました。おそらく無視されるだろうと思っていたのですが、なんとびっくりでした。勤務中にもかかわらず、ハグされて、大粒の涙で泣き始めたのです。私には本当に予想だにしていなかった行動でした。年単位で私を無視し続けた人がお客様に囲まれても、人目もはばからず大泣きするとは。そして梶田さんは涙を流しながら、声をかけて背中をバンバンと叩いてくれました。「とうとうか。がんばれよ。応援しとるで。応援しとるでよ」。この時、私は今まで出会ったことのない類いの人と初めて出会ったのです。なぜこの人は泣くんだろう。なぜなんだと。仲が悪かろうと、何の関係もなかろうと、流れ者である限り、これから一生再会することがないかもしれないのに、私のことを心配し、大粒の涙を流してまで、新しい道に送り出してくれる人とは一体何なのだ。私も思わず大泣きしてしまいました。

私の変化

この経験をした時、私の中で何かが大きく変わりました。自分の視点でしかものが見えていなかった自分の何かが変わりました。ある意味で、私は親子関係を通して知らなかった「愛」という何かしらのものを知ったわけです。その時、私はそれ以後、このある意味底辺を生きる人たちと同じ世界、つまり同じような価値観、同じような言葉遣い、同じようなものの見方を決して失わず、生きていこうと決めました。そしていつか彼らの恩に必ず報いようと。この同志社大学で働く私は、時に教員らしくないということでお叱りを受けることもあります。でも、捨てたくないのです、彼らの世界を。今でも仕事をしていく中でしんどい時、

人生で躓きそうな時があります。そういう時、梶田さんの大泣きする姿が自然に思い出されます。鈴木さんのベロベロに酔っ払った姿が思い出されます。「おまえは頭いいんだから、世界を変えてくれ。頑張れよ」と言っていた彼らの姿が、職場の皆さんの姿がスティグマのように心につき刺さっています。彼らの姿は、つらくなった時の、ある意味心の支えになっております。くそ、諦めるかと。

「愛」

話を戻します。本日の聖書箇所は、愛についての箇所です。愛という言葉は平凡ですが、その体験は確実に私たちを変えます。皆さんもそうだろうと思いますが、私たちはいろいろな人から少しずつ愛されて育てられてきました。そこから生きる意義が生み出されるのです。だから、愛されたのだから、次の世代の人々に愛を返す必要・義務があります。それは、愛をくれた人自身に対して返すべきということでは必ずしもありません。同志社大学に入社してから数年して、働いていたパチンコ屋を再訪しました。そこはもう違う会社のパチンコ屋になっていて、知っている人は誰一人おりませんでした。もう恩を返す人はおりませんでした。よく鈴木さんや梶田さんと一緒に行っていたコメダ珈琲でその雰囲気を楽しんで、飲み込んで、モーニングを食べて帰りました。当時の彼らはどこに行ったか分かりません。年数的に考えて、もう亡くなっているのかもしれませんが。昔の関連会社に電話をしたりして、しばらく探してみましたが分かりませんでした。こうしたこともあるので、だからこそ、ただで与えられたのだから、ただで次のとなりの人に与えなければなりません。とは言っても、若い時は多少自己中でも良いと思います。恐れを知らぬのが若者の特権であり、強みなのですから。でも年を取って、30代、40代になって余裕が出たら、次の人に愛を返してあげてください。そうやって世界は回ってきたのです。愛の連鎖という流れの中で、私たちは生きているという実感を与えられて生きてきたのです。私の場合で言えば、生の実感を得られなかった若かりし頃に、これまで出会ってきた人々のおかげで「私」が与えられました。それくらい愛は大切です。足りない人は素直に求めましょう。ある人は素直に与えましょう。それがイエス・キリストの教えだからです。

お祈りします。

在天なる神様。本日もこうやって皆とともに礼拝を守れたことに感謝します。コロナ禍が始まって、約二年たちます。新型コロナウイルス感染症で多くの人が苦しんだだけではなく、新型コロナウイルス感染症による経済停滞によっても多くの人が苦しみ、自ら死を選んだりしています。地下鉄の駅には「一人ひとりが大切」との言葉が書かれておりますが、逆に言えば、私たちはある意味ですべての人が凡庸で大切ではない世界に生きています。自己責任という言葉で簡単に人を追い込む世界に生きています。愛が見えない社会に生きています。確かに、失われた30年と言いながらも、整備されて質のいい生活ができるようになりました。でも同時に、社会のどこにでもあった隙間・遊びの部分がなくなっていました。結果として、簡単に社会から脱落し、復帰するのが難しい社会になりました。会社にしがみつくことがリスクになり、家族をもつことさえもリスクになってしまいました。私たちはどこに向かっているのでしょうか。自己の価値を示し、効率を計算して生きなければならない世界では、あえて隙間を作るために無条件の愛の力が必要です。無駄な努力と思わず、互いに愛し合うことで、本当の意味で広がりのある、よりよき世界にする力をもたなければなりません。神様、そうした視点を失わず、そうした力を発揮できるようにお支えく

ださい。誰しものが生を楽しんで生きる世界にできるように私たちの努力を支えてください。この小さな祈り、イエス・キリストのみ名においておさげします。アーメン。

2021年10月20日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録